

上御殿遺跡発掘調査現地説明会資料

平成 25 (2013) 年 8 月 11 日 (日) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



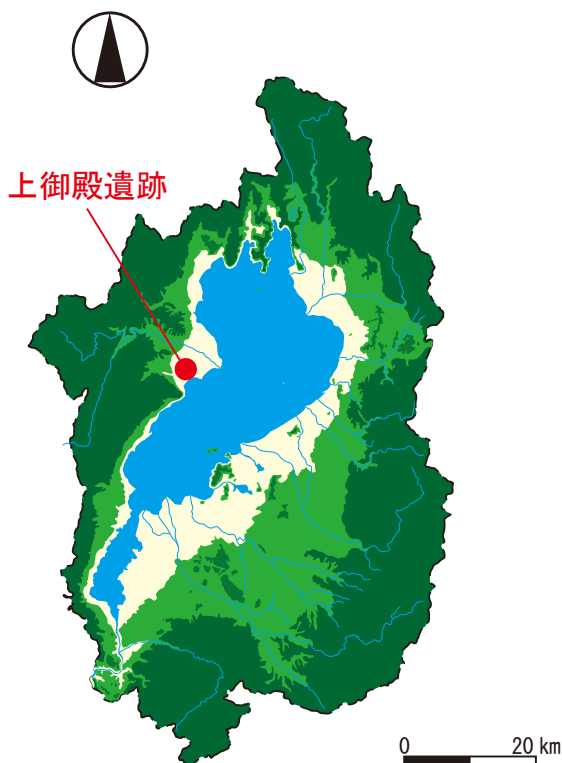
公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

調査の概要

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会と滋賀県高島土木事務所からの依頼により鴨川広域基幹河川改修事業(青井川)に伴い平成 20 年度より、高島市の天神畑遺跡(鴨地先)と上御殿遺跡(三尾里地先)の発掘調査を行っています。

平成 25 年度の調査は、4 月から実施しており、これまでに縄文時代中期末から後期初めの小穴・土坑、古墳時代前期から平安時代の川跡や平安時代の護岸工事の跡、奈良から平安時代の掘立柱建物などを確認することができました。

なかでも、建物跡がある場所から川跡などがある低地に向けて低くなる傾斜地に国内初となる「双環柄頭短剣」の鑄型が出土するなど貴重な成果が得られました。



年代	時代区分		日本の主な出来事	天神畑・上御殿遺跡の主な調査成果
	中国	日本		
B.C.770年	周	縄文	約 2500 年前 稲作始まる。	縄文時代中期後半(4000 年前) 土器棺墓
B.C.500年	春秋			
B.C.220年	戦国	弥生	248 年頃 卑弥呼死す。 前方後円墳が各地にさかんに築造される。 鴨稲荷山古墳(500年)	双環柄頭短剣の鑄型(弥生時代～古墳時代前期)
	秦			
	前漢			
	新			
	後漢			
300年	魏吳蜀	古墳	6C初 継体大王 即位 645 年 大化の改新(乙巳の変)。	弥生時代終末(3 世紀前半) 方形周溝墓 古墳時代前期(4 世紀後半) 竪穴住居 古墳時代前期～中期前半(4～5 世紀前半) 木棺墓 古墳時代前期～後期(4 世紀～6 世紀) の川跡 石釧、建築部材、祭祀遺物
	晋			
600年	南北朝	飛鳥	667 年 近江大津宮へ遷都。 710 年 平城京へ遷都。 742 年 紫香楽に離宮を造る。	奈良時代～平安時代(8 世紀～11 世紀) 掘立柱建物 奈良時代～平安時代(8～12 世紀) 川跡 人形代・馬形代・「守君舩人」の墨書人名土器 護岸工事(平安時代後期)
	隋			
700年	唐	奈良	794 年 平安京へ遷都。 1016 年 藤原道長が摂政となる。	平安時代後期～鎌倉時代初期 馬具(轡:くつわ)
800年	五代			
1200年	宋	平安	1192 年 源頼朝が征夷大將軍となる。 1336 年 足利尊氏が征夷大將軍となる。	室町時代後期(15・16 世紀) こけら経 ※ナナメ文字は、平成 20～24 年度の主な調査成果
1300年	元	鎌倉		
		室町		

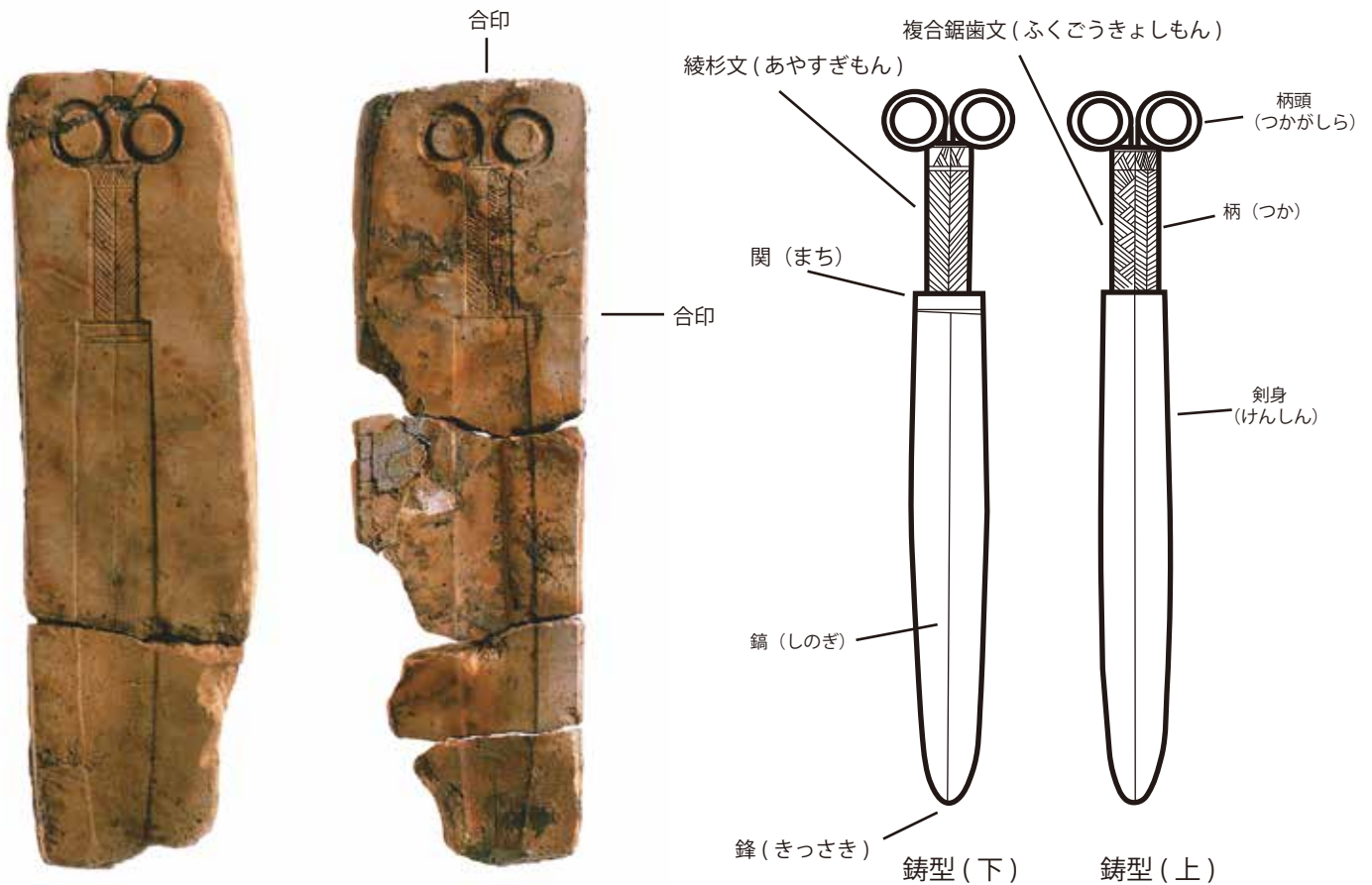
双環柄頭短剣鑄型

今回の調査で出土した鑄型は、国内だけではなく朝鮮半島でも見つかっていない春秋戦国時代（BC 770～221）の中国北方地域（中国河北省北部、北京北部、内蒙古中南部）のオルドス式銅剣と関係のあると考えられる双環柄頭短剣の鑄型で2個1組出土しました。鑄型は、単独で剣の彫り込みがある面を合わせて、低地（川？）の岸に置かれた状態で出土しました。古墳時代前期以降この川で行われる水辺の祭りの初現的なものだったかもしれません。

鑄型は使用されていません。その理由は明らかではありませんが、上下の鑄型に彫り込まれた柄の長さに長短がある点などから未完成か失敗品の可能性もあります。鑄型として完成品だとすれば、なぜ鑄込まなかったのかナゾが残ります。この鑄型の時代は、周辺の遺構の状況や鑄型に彫られた剣の文様等から弥生時代から古墳時代前期と考えられます。



鑄型出土状況



鑄型 (出土時下)

鑄型 (出土時上)

長さ約 29.5 cm、幅約 8.8 cm、厚さ 鑄型 (下) 約 4.4 cm、
鑄型 (上) 約 3.6 cm

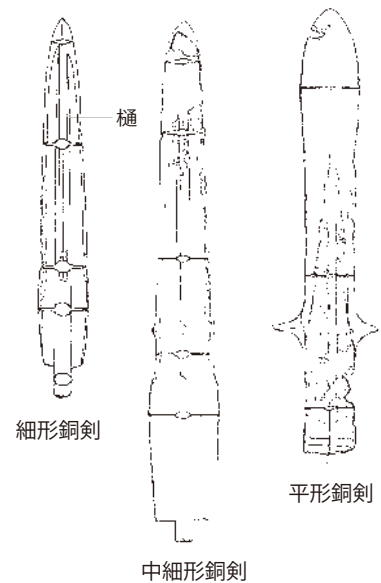
復元短剣模式図と短剣部位の名称 (S = 1/3)

鑄型から復元される短剣

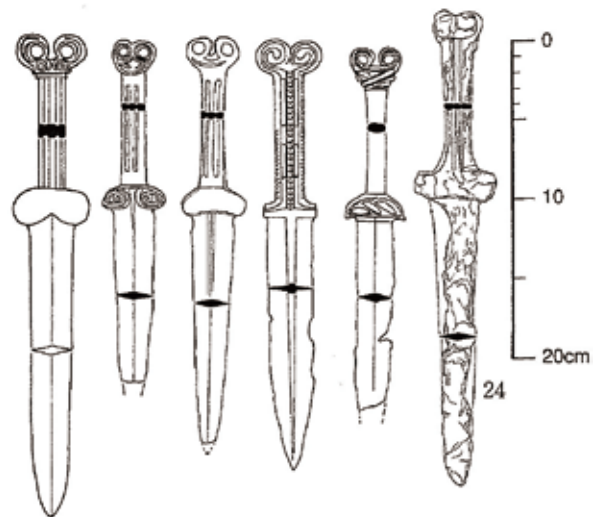
この鑄型から復元される短剣の特徴は、柄頭に二つの環(わ)、柄と剣身を一回で鑄造(一鑄)している点です。九州を中心とする弥生時代の銅剣は柄と剣身を別に作っています(別鑄)。また、弥生時代の銅剣には樋(ひ)と呼ばれる血流しの溝がありますが、上御殿遺跡で復元される短剣には樋はなく、国内や朝鮮半島の銅剣より、むしろ下図にある中国北方のオルドス式銅剣との類似性が認められます。

しかし、柄の文様や柄頭の形状、鏢(つば)の有無など違いも多く、オルドス式銅剣をモデルとして国内で作られたものと考えられます。

今回の新発見によって、朝鮮半島から九州地方に伝わった銅剣文化とは違う系統の文化が日本列島にも伝わっていた可能性が強くなりました。こうした文化は日本海を通じて、九州地方を経由せず伝わったものか、今後の新たな類例の発見で明らかになると考えられます。



弥生時代の主要銅剣
(縮尺不同 吉田 2001 より抜粋)



オルドス式短剣 (町田 2006 より抜粋)

平成 24 年度調査の成果から

平成 24 年度の調査では、古墳時代前期から平安時代にかけての川跡(その当時の青井川)がみつき、多くの水辺の祭祀に関する遺物が出土しました。その中で、奈良時代から平安時代にかけての木製人形代が 51 点、木製馬形代が 23 点出土しました。人形代は県内 2 番目の出土数で、馬形代は県内で最も多く出土しています。

人形代は、現在、神社で行われている紙製の人形に息を 3 回吹きかけて悪気や汚れを人形に移し、清らかな水に流す大祓と同じような使い方をされたと考えられます。

上御殿遺跡は平安時代まで連綿と昔の青井川で、祭祀を行っていたことがわかります。また、「守君舩人(もりのきみのふなひと)」と 7 列に縦書きされた国内では例のない墨書人名土器や今回の鑄型など全国的にも類例のないものが多く出土など、東西南北の文化の要衝として古くから重要な地域であったことを出土遺物が語っています。



人形代



墨書人名土器

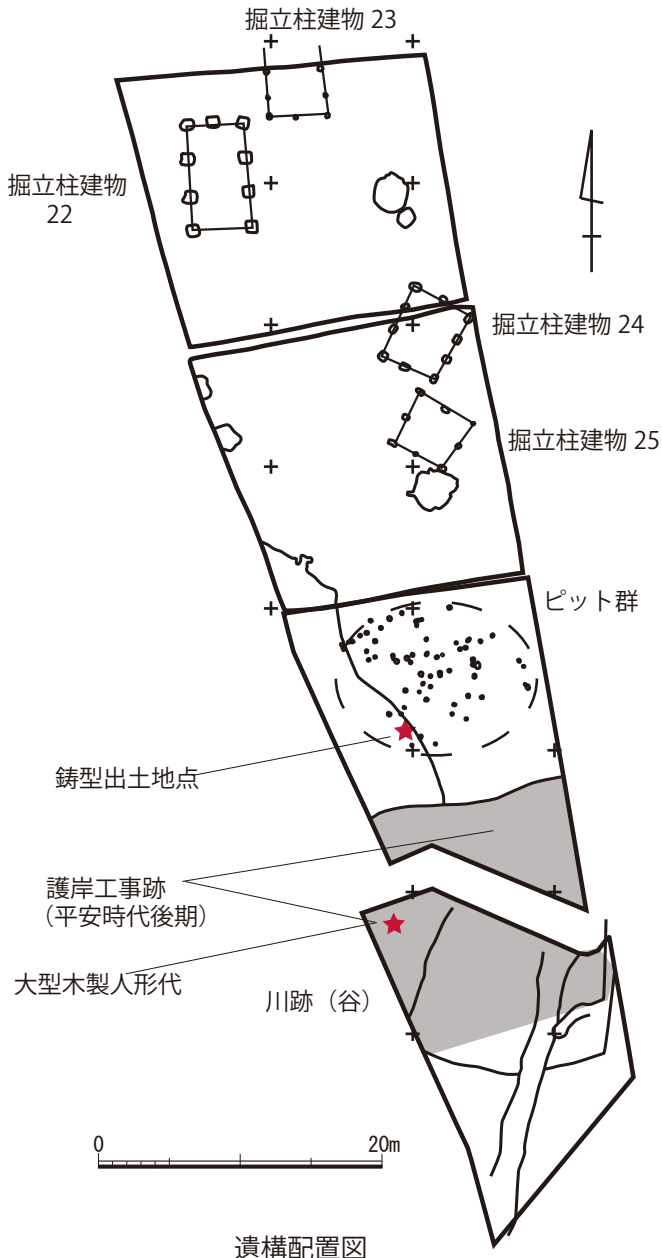


馬形代

青井川の護岸工事

調査区の南端付近で、幅約 18mの谷がみつかりました。この谷には、約 100m南で見つかった平成 24 年度調査区の谷と同様に古墳時代前期から平安時代後期まで、川が流れていたことがわかりました。両方の谷を流れていた川の時期がほぼ同じであることから、当時の青井川であったと考えられ、現在と比べると、古墳時代から平安時代の川は、大きく蛇行しながら流れていたようです。

今年度の調査では、平安時代後期(11世紀から12世紀)の青井川の護岸工事と思われる遺構が出土しました。その遺構は杭を斜めに打ち込み、その上に部材を再利用し、網代編みされています。こうした構造物は軟弱地盤で、岸が崩壊しやすい部分に設置され、その上に土を突き固めて護岸工事を行ったと考えられます。はっきりとわかる青井川河川改修工事の最も古い事例です。この遺構の下から大型の木製人形代が出土しており、工事の成功を祈願して埋められたのかもかもしれません。



護岸工事跡 (平安時代後期)